

台風・上水・鮎の〈連関〉の環境史

渡辺浩一

寛保二（一七四二）年寛保大水害後の奥多摩溪谷と江戸

“Interrelated Environmental History” between the Typhoon, Aqueduct and Sweet Fishes

WATANABE Koichi

はじめに

- ① 寛保二（一七四二）年寛保水害への幕府の対応
 - ② 玉川上水の濁り問題
 - ③ 奥多摩溪谷の浚い流し普請
 - ④ 鮎と人間
- おわりに

【論文要旨】

本稿は、自然災害を起点とした〈連関〉の環境史研究のための実験である。「〈連関〉の環境史」とは、歴史の主体を人間だけでなく他の生物種、モノ、自然現象も含めて考え、その相互連関を分析・叙述していくこうとする新しい試みである。地球温暖化による環境危機が進行している現在、歴史学も人間中心史観から脱皮しなければならぬ。

この新しい試みのために意識した方法は以下の通りである。①生態学の方法と思考を援用すること。②土木工学・地形学・生態学の研究成果を補助線として用いることにより、文献史料をより深く読み込むこと。③多様な歴史主体を平板に羅列するのではなく、媒介項を措定すること。以上三点である。

寛保二（一七四二）年八月の台風は、江戸に大きな被害をもたらすとともに、奥多摩溪谷で大規模な土砂崩れを引き起こした。そのため多摩川の水が数年単位で濁り、したがって江戸の上水である玉川上水も濁ったままになった。玉川上水は、江戸住民に飲料水を供給していたばかりでなく、江戸城本丸や三の丸の庭園泉水としても利用

されていたため、玉川上水ひいては多摩川の濁りを取る対策を幕閣は協議することになった。いくつかの案を検討した結果、奥多摩溪谷から取水口までの長区間に堆積した泥を浚って流す工事を行った。この過程からは、自然改造を躊躇しない開発主義を読み取ることができる。

一方、大規模な土砂崩れにより多摩川上中流域の自然環境は一変し、鮎の生育環境は決定的に悪化した。上述工事の効果として濁りは一時的には解消されたが、増水のたびに長期間水が濁る現象が数十年にわたって繰り返された。そのため鮎が少なくなっていたが、鮎は將軍に毎年上納されなければならなかったために、流域の人々は生簀を用いて雌鮎を選別するという鮎の生態に介入する方法も用いて鮎を確保した。以上のように、台風を共通の起点とした二つの現象「水道の濁りと鮎の減少」は、江戸という將軍が居住する巨大都市を媒介としても〈連関〉していたのである。

【キーワード】災害、日本近世、水、溪谷、江戸城